

村上海賊の史跡を巡る旅(2)

TOZSUN

瀬戸内海の古代山城

前号の内容は村上海賊に関することが中心だったが、同じ今治市の資料の中に、隣の西条市の「永納山城跡」の資料が入っていた。ここは愛媛県では唯一の古代山城(さんじょう)という。村上海賊の島城との違いに興味を沸かせてきたので、この古代山城について調べてみた。



(西条市教育委員会発行)

1300年前の7世紀後半の頃に九州・瀬戸内海沿岸に25カ所築城されたという。村上海賊が活躍していたのが16世紀後半だったので、9世紀も前の飛鳥時代まで遡ることになる。660年朝鮮半島の百済は、唐・新羅連合軍に滅ぼされたが、復興するために倭(日本)に援軍を要請してきた。知識や文化・技術などを最も親密な関係で取り入れていた百済復興のために出兵し、663年白村江の戦いで唐の巨大な軍事力の前に敗戦してしまっ



(西条市教育委員会発行)

た。その際、百済の高官や技術者など多数を受け入れたことが、日本の総合的な向上につながった。周防柳著の「蘇我の娘の古事記(ふることぶみ)」に登場する歴史を記録する集団などがそれにあたる。このとき、唐の倭国侵略を恐れた大和朝廷は、九州・瀬戸内海各地に山城を百済からの技術者に依拠して建設している。それゆえ、その建築技術から「朝鮮式山城」という。

吉備の歴史と楯築弥生墳丘墓の存在



関裕二著の「消えた海洋王国吉備物語」の正体。古代史謎解き紀行の中に登場する鬼ノ城と楯築弥生墳丘墓を見学するために吉備に立ち寄った。妻には「姫路城見学」で

機嫌をとっておいいたので、何もな
い楯築古墳に付き合ってくれた。
残念ながら鬼ノ城へは時間の都



(西条市教育委員会発行より一
部抜粋記述)
合で行けなかったのは残念であ

る。次回は一人で岡山でレンタカ
ーを借りて回ってみたいと思っ
ている。

この場所と上の山城の「鬼ノ
城」が一致したことから次のよ
うな推測ができた。鬼ノ城は現
在は吉備平野の奥の方に城跡(現
在は観光地となっている)がある
が、ここが山城とすると、その前
の吉備平野は7世紀頃は海であ
り、鬼ノ城は海岸線に沿って建っ
ていたことになる。2世紀終わり
頃にできたと言われる楯築墳丘
墓に吉備氏の先祖が眠っていると
すると、彼らが7世紀頃に鬼ノ
城で勢力を振るっていたと思われ
る。手前の「児島」は小豆島ぐら
いの大きな島で、その裏側の海を
「備前大伯の海」と呼んでいた。
吉備氏の一部は、地震の際の大
津波を避けて瀬戸内海を移動し
生駒山の安住の地大和に入った
と予想できる。初期の大和王権
だったかもしれない。その後、物
部氏と名前を変え軍事を担当し
ていた。蘇我氏と同様、藤原不
比等によって前王権を抹消する
という歴史改竄で歴史から消え
てしまった。伝説として、桃太郎
に正敗された鬼ということになっ



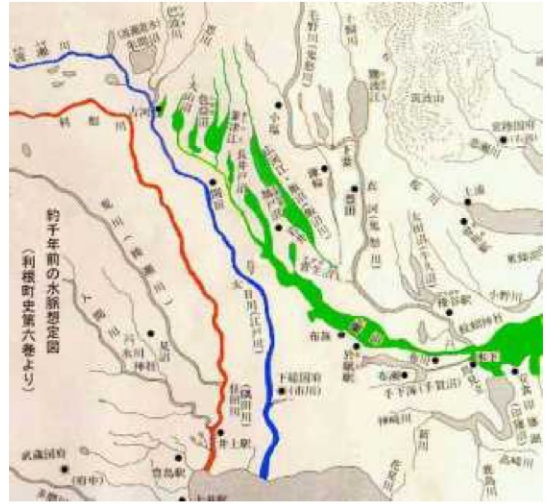
てしまった。
吉備津彦神
社に祭られて
いるのが桃太
郎で、鬼ノ城
が温羅(鬼、吉
備氏・物部氏)
の城というこ
とか。
なお話が飛
ぶが、16世
紀後半の村上
武吉の家臣に
「嶋吉利」がい

る。彼は、児島の西に本太城を
築城して塩飽諸島に村上賊の
ルールを徹底させたことでも知
られるが、現在は工場地帯の隅
の小さな丘になっているだけだ。

古代関東の内海としての 古東京湾と香取海

古代の海岸線の話の続きとし
て古代の関東を調べてみた。今回
の愛媛の旅とは関係ないが、以前
から興味があり「利根川」「香取
海」「平将門」を調べている。この
つながりで、熊野正也編の「古代

末期の葛飾郡」という本を手に入れた。これは東京の葛飾区にある「葛飾区郷土と天文の博物館」が中心に定期的にフォーラムをやっている内容をまとめた本である。利根川がまだ住田川（隅田川）を流れていた1000年前の話である。扱われているのは、下総国葛飾郡。北から順に言う
と、古河・五霞・幸手・杉戸・春日部・関宿・野田・流山・松戸・市川・船橋・葛飾区などがその範囲である。近くの守谷や柏は下総国相馬郡で、境や岩井は下総国猿島郡だった。これらの中心の



下総国国府は市川にあった。市川から流山にかけては官道に当たったため丘陵地に大量の遺跡が眠っており、その発掘により、葛飾区の古代が想像できるところから葛飾区が積極的に研究を進めており、その他の市町村は教育委員会が関与している。なお、近世では葛飾区は武蔵国葛西領に編入されている。
このフォーラムは、いろいろな内容に取り組んでいるが、その中で私が注目したのは、将門の乱と内海（古東京湾と香取海）や官道（東海道の変遷）です。特に官道については、知人が住んでいる流山市三輪野山を訪ねたとき、江戸川縁であるのにも関わらず坂道が多いので不思議に思ったことがある。ここはもともと丘陵地で古代の国府を結ぶ官道が通っていた場所だった。下総国国府（市川市）から北上し、この三輪野山で右折し、手賀沼より香取海に入り常陸国国府（石岡市）に向かう道が考えられている。それにしても、ここに出てくる香取海の大きなこと。この海と川を利用して平将門やその甥である平忠常は関東武士の先祖になって

下総国国府は市川にあった。市川から流山にかけては官道に当たったため丘陵地に大量の遺跡が眠っており、その発掘により、葛飾区が想像できるところから葛飾区が積極的に研究を進めており、その他の市町村は教育委員会が関与している。なお、近世では葛飾区は武蔵国葛西領に編入されている。
このフォーラムは、いろいろな内容に取り組んでいるが、その中で私が注目したのは、将門の乱と内海（古東京湾と香取海）や官道（東海道の変遷）です。特に官道については、知人が住んでいる流山市三輪野山を訪ねたとき、江戸川縁であるのにも関わらず坂道が多いので不思議に思ったことがある。ここはもともと丘陵地で古代の国府を結ぶ官道が通っていた場所だった。下総国国府（市川市）から北上し、この三輪野山で右折し、手賀沼より香取海に入り常陸国国府（石岡市）に向かう道が考えられている。それにしても、ここに出てくる香取海の大きなこと。この海と川を利用して平将門やその甥である平忠常は関東武士の先祖になって



古布内、木間ヶ瀬、小山）見られる。江戸時代より前は同じ村であったのだろう。
なお、当時の大きな川として流れていたのは、利根川（会）の川↓葛西用水路↓大落古利根川）と考えられる。この

いく。
1600年頃から始まった利根川東遷工事は最終的に、茨城県古河市や猿島郡境町や坂東市（岩井）と埼玉県の幸手市や北葛飾郡杉戸町や春日部市との分離につながっていく。平将門が騎馬に乗り坂東市から幸手市の権現堂付近まで駆け抜けた昔を想像してみたくなって地図から川を消してみた。
利根川の開削による場所を検討すると、利根川の両側に同じ地名が5箇所（新田戸、桐ヶ作、

川は幸手市の西側を流れていたことになる。この川の東側が杉戸町（下総国葛飾郡）で、川の西側が宮代町（武蔵国埼玉郡）だったので、平将門の守備範囲として幸手や杉戸が含まれていたようだ。その杉戸町下高野に永福寺が建てられている。この永福寺は「どじょう施餓鬼」の寺として有名だが、焼け落ちた永福寺を942年に第14世に襲名し再建した披山優婆塞は、平将門の子と言われており、滅んだ将門軍を弔ったと思われる。

幸手の権現堂の先に内国府間（うちごうま）と外国府間があるが、不思議な地名である。ある人が調べたところによると、八王子市にある武蔵国府と市川市にある下総国府と栃木県下野市にある下野国府を結んだ古代の街道の分岐点にあたるようだ。外国府間から下野国府までは直線距離で32km、外国府間から下総国府までは43km、外国府間から武蔵国府までは51kmあったので、約3・4・5になる。平将門が下野と下総の国府の間を馬で駆け抜けた様子が目に浮かぶ。江戸時代より前の歴史は、川

の歴史を知った上で検討する必要性があることを痛感した。

謎 瀬戸内海・中世沈没船の

最後にもう一つ、瀬戸内海に眠る沈没船の調査資料を紹介する。トレジャーハンターという中傷がある中で、「水中考古学」として、水中から引き上げられた遺物を調査し、沈没した時代背景を調べていく緻密な作業である。

ナウマンゾウの化石や旧石器時代の石器や波方縄文土器（注口土器）などが大量に海底に眠っていることが分かったそうだ。



（今治市村上水軍博物館発行）

約1万年前に瀬戸内海に海水が入り始め、徐々に潮位の変化に従って縄文時代の遺跡が水没または沿岸が浸食していったと考えられる。

十二世紀に入ると、瀬戸内海の水運の飛躍的な発達に重なって、水中考古資料が増えていく。この時期に村上水賊たちの安全航行に関する役割が増大していったようだ。

また、伯方島の「ビキ」と呼ばれる砂浜では、縄文土器や古代に至るまでの遺物が採取されており、能島城や来島城とあわせて「水中文化遺産」となっている。この本には「早崎水中遺跡」や「友ヶ島北方沖海底遺跡」や宇治島南方の沈没船「海援隊のいろは丸」調査や「水の子岩海底遺跡」や宮窪瀬戸の「古波止遺跡」などの調査結果などが詳細に記載されている。

やういふに

村上水賊の紀行文のはずが、あちこちに飛んでしまい、恥ずかしい限りですがお許しください。